

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01729

研究課題名(和文) スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント：認識にかかわる要因の検討

研究課題名(英文) Sexual harassment in the sports environment: examining the factors that determine the perception

研究代表者

熊安 貴美江 (KUMAYASU, KIMIE)

大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：90161710

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツ環境におけるセクハラ認識の因果要因を検討するため、スポーツ関係者(指導者、競技者、愛好者)を対象にWeb調査を実施した。セクハラ認識に対しては、「スポーツ環境認識」と「自尊感情」以外の3変数：「権威主義的伝統主義」と「ジェンダー平等観」、「同性愛親和度」が影響することがわかったが、本モデルの説明力は、全体として高いとはいえなかった。愛好者は他の2群に比べて相対的にモデルの説明力が高いが、指導者と競技者は、このモデルではセクハラ認識をあまりよく説明できなかった。その理由として、指導者や競技者など、スポーツに深く関わる人たちに特有の「セクハラ認識」形成要因が何か他に存在することが想定された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のスポーツ環境におけるセクハラ認識とそれに影響を与える要因を検討することで、スポーツ環境下で共有されている根強いジェンダー意識や集団主義的な人権意識を問い直す契機となり、また具体的な防止対策に新しいエビデンスを加えることができる。さらに、スポーツ環境における継続的な調査自体が、スポーツ関係者に対する不断の意識啓発にもつながり、スポーツ環境において後景化しがちなセクハラ問題の可視化にもつながりうる。

研究成果の概要(英文)：In order to examine the factors that determine sexual harassment perception in the sports environment, we conducted web surveys of sports instructors, athletes, and amateur players.

It was found that three variables other than “perception of the sports environment” and “self-esteem”： “authoritarian-conservatism”, “gender equality” and “affinity for homosexuality” affected sexual harassment perception. However, the assumed causal model did not explain this causality very well as a whole. Although amateur players were relatively more descriptive of the model than the other two groups, instructors and athletes could not explain sexual harassment perceptions very well with this model.

It was assumed that the reason for this was that there were some other factors that affected “sexual harassment perception” peculiar to people who were deeply involved in sports, such as instructors and athletes.

研究分野：スポーツとジェンダー

キーワード：スポーツ セクシュアル・ハラスメント 認識要因 因果関係

1. 研究開始当初の背景

欧米では1980年代後半から多くの研究成果が蓄積され、国家のスポーツ担当部局や主要なスポーツ組織におけるセクハラ防止対策の策定など、実践的課題の解決に積極的に活用されてきた。現在そうした対策の多くは、セクハラを含むより包括的なハラスメントの中に位置づけられ (Mountjoy, et al., 2016)、関係者の意識啓発や組織の防止対策としてスポーツ環境改善に生かされている。

日本では、筆者らがこれまでに2度の調査を行い、いくつかの知見を得て (熊安ら, 2011; 高峰ら, 2009; 2011)、指導者啓発プログラムを開発するとともに (高峰と熊安, 2012)、組織における対策案を提示してきた (熊安と高峰, 2015)。しかしながら国内外を問わずスポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント事例の告発あるいは発覚は続いており、依然としてスポーツ界が抱える深刻な問題としてある。

また、これまでに筆者らが得た知見は、国内の大学生やハイレベルにいる指導者と競技者のスポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識を明らかにしようとするものであったが、そのようなセクシュアル・ハラスメント認識がどのような要因によって形成されるのかについては検討課題として残されていた。

2. 研究の目的

今日国際的に共有されているより包括的な概念を適用して、日本のスポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント (以下、セクハラ) 認識の実態を明らかにし、セクハラ認識に影響を与える要因を検討する。

3. 研究の方法

(1) スポーツ関係者 (指導者、競技者、愛好者) を対象に Web 調査を実施した。

(2) 調査項目として、ジェンダー観や性的マイノリティへの意識、自尊感情、スポーツ観やスポーツへの志向、組織の集団的権威に対する価値観などを要因として想定した。プレテストによって得たデータを分析し、各変数の信頼性と妥当性を検討し、その結果に基づき分析に使用する設問項目を選別した (高峰と熊安, 2021)。日本のスポーツ環境におけるより包括的な概念を適用したセクハラ認識の実態分析は、熊安と高峰 (2021) に示した。

(3) 本報告で検証する包括的因果モデル (図1)

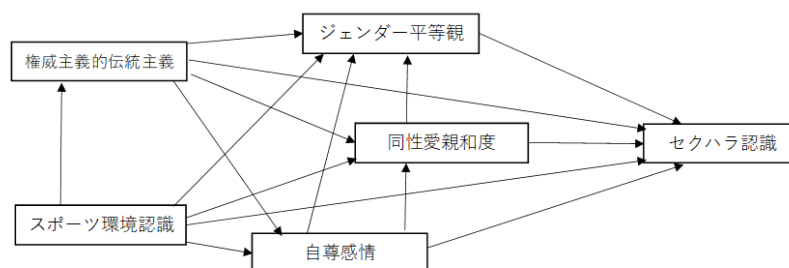


図1. セクハラ認識を説明する包括的因果モデル

(4) 分析方法

- ・図1に示した包括的因果モデル内の目的変数 (セクハラ認識) と5つの説明変数間の相関係数を算出した。
- ・包括的因果モデルを共分散構造分析にかけ、有意でない標準化係数を削除し、再度同じ分析をおこなった。

4. 研究成果

4-1. 分析結果

相関係数の全体的な傾向として、「自尊感情」と「同性愛親和度」は、セクハラ認識と有意な相関を示さなかった。また女性競技者は、すべての説明変数が目的変数と有意な相関を示さなかった。共分散構造分析の結果は以下のとおりである。

(1) 因果関係<全体> (図2)

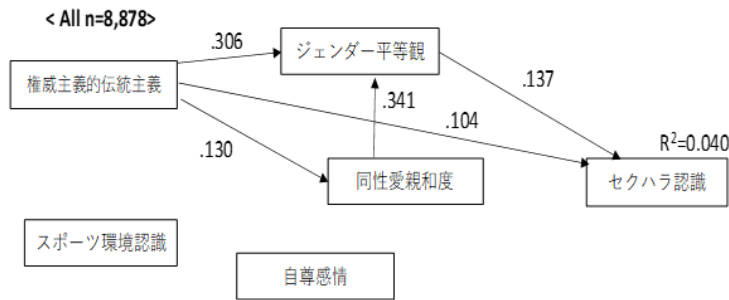


図2. セクハラ認識を説明する因果関係<全体>

- ・本モデルの説明力は、全体として高いとはいえない。
- ・セクハラ認識は、「権威主義的伝統主義」から直接効果として 0.104、間接効果として 0.048 の影響を受けており、直接効果の影響が大きい。
- ・「スポーツ環境認識」と「自尊感情」は、セクハラ認識に影響力をもたない。

(2) 因果関係<性自認別> (図3)

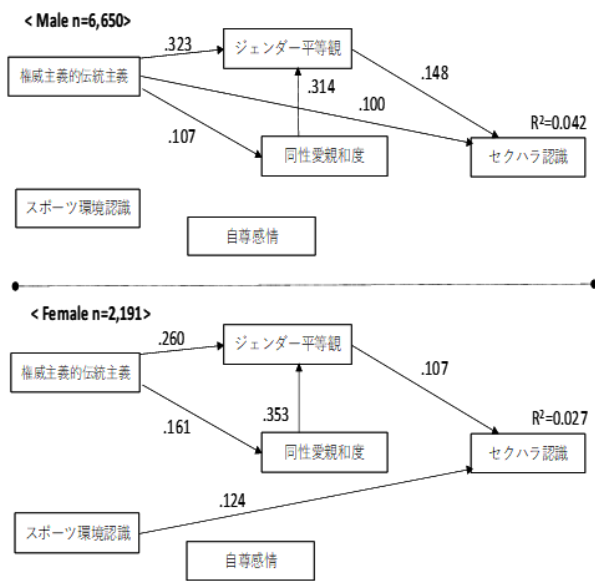


図3. セクハラ認識を説明する因果関係<性自認別>

- ・男性：
対象全体で示したものと同様の因果関係が確認された。
- ・女性：
男性のモデルで確認された因果関係に加えて、「スポーツ環境認識」がセクハラ認識に対して直接の因果関係をもったが、「権威主義的伝統主義」は有意ではない。
「自尊感情」は他の説明変数と相関を持たず、またセクハラ認識に対しても影響を及ぼさない。

(3) 因果関係<対象グループ別 (指導者・競技者・愛好者)> (図4)

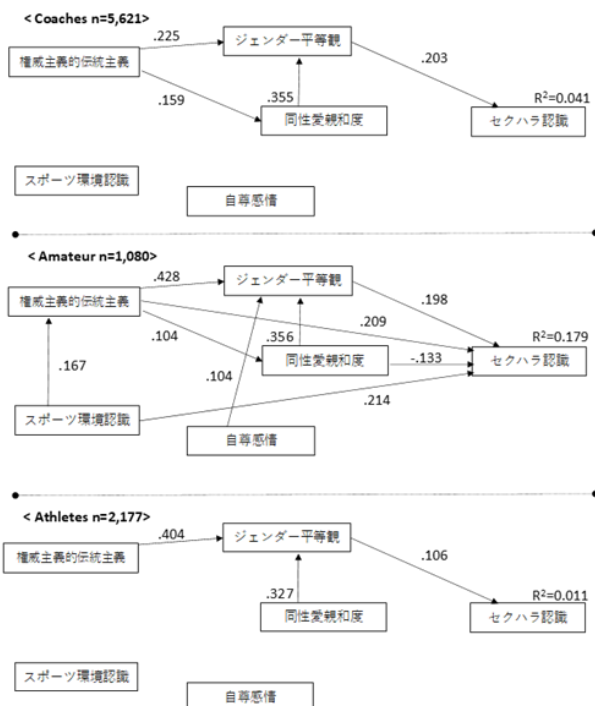


図4. セクハラ認識を説明する因果関係<対象グループ別>

- ・指導者と競技者：
このモデルではセクハラ認識をあまりよく説明できない。このモデルで使った以外の変数の影響を受けている。
- ・愛好者：
他の2群に比べて、相対的に説明力が高い。

(4) 因果関係＜性自認×指導者＞ (図 5)

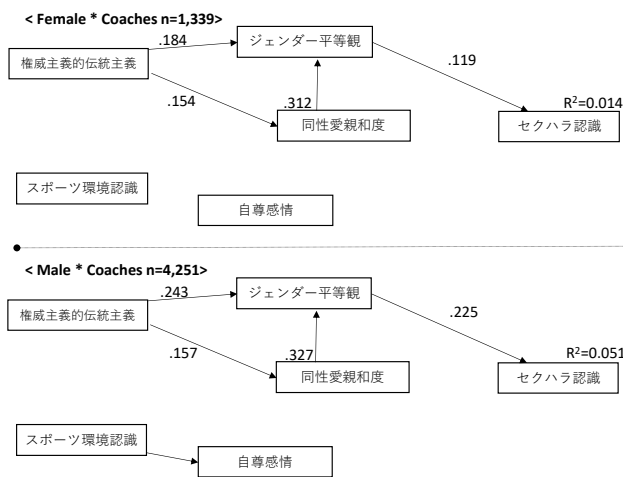


図5. セクハラ認識を説明する因果関係＜性自認×指導者＞

・女性指導者と男性指導者で因果関係は同様の傾向を示すが、男性の方が女性よりもわずかに説明力が高い。

(5) 因果関係＜性自認×愛好者＞ (図 6)

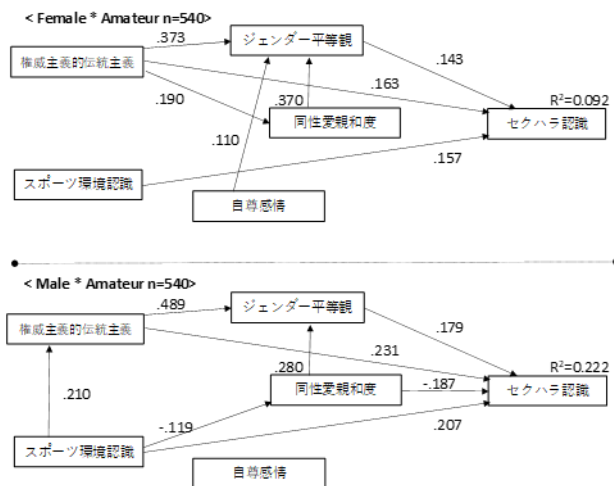


図6. セクハラ認識を説明する因果関係＜性自認×愛好者＞

・女性愛好者：
スポーツ環境認識が直接セクハラ認識を説明する（直接効果のみ）。
・男性愛好者：
スポーツ環境認識が、直接効果だけでなく、ほかの説明変数も介してセクハラ認識を説明する（間接効果もある）。
・男性愛好者における説明力は女性愛好者よりも高い。

(6) 因果関係＜性自認×競技者＞ (図 7)

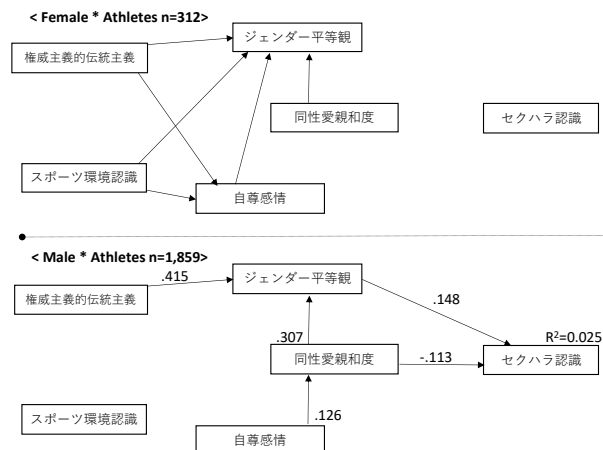


図7. セクハラ認識を説明する因果関係＜性自認×競技者＞

・女性競技者：
このモデルは彼女らのセクハラ認識を説明する力がない。
・男性競技者：
自尊感情が同性愛親和度などを介してセクハラ認識に間接効果を持つ。

<モデル適合度>

モデル適合度を表 1 に示した。モデル適合度を示す指標はそれほど悪くなく、おおむね適合するといえる。

表1. モデル適合度

		n	X ² 値	GFI	AGFI	NFI	CFI	RAMSEA	AIC
全体		8,878	46.802***	0.997	0.974	0.984	0.985	0.072	64.802
女性		2,191	58.615***	0.990	0.969	0.919	0.925	0.070	78.615
男性		6,650	57.001***	0.996	0.958	0.973	0.973	0.092	75.001
競技者		2,177	44.843***	0.99	0.968	0.945	0.948	0.080	58.843
指導者		5,621	26.744***	0.998	0.988	0.984	0.985	0.047	42.744
愛好者		1,080	24.988***	0.922	0.973	0.967	0.975	0.054	54.988
女性	競技者	—	—	—	—	—	—	—	—
	指導者	1,339	16.707***	0.994	0.969	0.941	0.947	0.074	32.707
	愛好者	540	14.817 n.s.	0.991	0.976	0.953	0.978	0.040	40.817
男性	競技者	1,859	42.120***	0.991	0.974	0.942	0.948	0.063	62.120
	指導者	4,251	13.334**	0.998	0.992	0.989	0.991	0.037	29.334
	愛好者	540	3.729 n.s.	0.997	0.979	0.99	0.995	0.04	29.729

4-2. まとめ

- (1) セクハラ認識に対しては、「スポーツ環境認識」と「自尊感情」以外の3変数：「権威主義的伝統主義」と「ジェンダー平等観」、「同性愛親和度」が影響することがわかったが、本モデルの説明力は、全体として高いとはいえなかった。
- (2) 愛好者は他の2群に比べて相対的にモデルの説明力が高いが、指導者と競技者は、このモデルではセクハラ認識をあまりよく説明できなかった。
- (3) 上記の理由として、指導者や競技者など、スポーツに深く関わる人たちに特有の「セクハラ認識」形成要因が、何か他にあることが想定される。
- (4) 今後の調査課題として、セクハラ認識自体の構造をより深く探る必要がある。

<参考文献>

- ・熊安貴美江、飯田貴子、太田あや子、高峰修、吉川康夫（2011）スポーツ環境における指導者と選手の適切な行為—セクシュアル・ハラスメントに関する男性指導者と女性選手の認識と経験—、スポーツとジェンダー研究 9：19-32.
- ・熊安貴美江、高峰修（2015）スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント：スポーツ組織におけるセクハラ防止ガイドラインの作成、スポーツとジェンダー研究 13：180-192.
- ・熊安貴美江、高峰修（2021）スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識と関連要因の検討—指導者・競技者・愛好者への調査より—、大阪府立大学女性学研究センター、女性学研究 28：73-101.
- ・Mountjoy, Margo; Brackenridge, Celia; Arrington, Malia; Blauwet, Cheri; Carska-Sheppard, Andrea; Fasting, Kari; Kirby, Sandra; Leahy, Trisha; Marks, Saul; Martin, Kathy; Starr, Katherine; Tiivas, Anne; and Budgett, Richard (2016) The International Olympic Committee Consensus Statement: Harassment and Abuse (Non-Accidental Violence) in Sport. British Journal of Sports Medicine 50(17): 1019-1029.
- ・高峰修、飯田貴子、井谷恵子、太田あや子、熊安貴美江、吉川康夫（2009）女子大学生がスポーツ環境において経験するセクシュアル・ハラスメントの特徴と構造—体育会とスポーツ系サークルの比較—、スポーツとジェンダー研究 7：16-28.
- ・高峰修、飯田貴子、太田あや子、熊安貴美江、吉川康夫（2011）日本のスポーツ環境における大学生のセクシュアル・ハラスメント認識に及ぼす要因の影響：性別に着目して—、スポーツとジェンダー研究 9：33-41.
- ・高峰修、熊安貴美江（2012）スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメントの問題 指導者向けプログラム（DVD）
- ・高峰修、熊安貴美江（2021）スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識にかかわる要因の検討、明治大学教養論集 通巻 552：175-197.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 熊安貴美江・高峰修	4. 巻 28
2. 論文標題 スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識と関連要因の検討 指導者・競技者・愛好者への調査より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 女性学研究	6. 最初と最後の頁 73-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00017329	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高峰修・熊安貴美江	4. 巻 552
2. 論文標題 スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識にかかわる要因の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教養論集	6. 最初と最後の頁 175-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高峰修	4. 巻 第2報
2. 論文標題 第2章「スポーツ指導者のスポーツ経験とスポーツ観に関する調査」結果報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平成30年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告 スポーツ指導に必要なLGBTの人々への配慮に関する調査研究-第2報-	6. 最初と最後の頁 1-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 熊安貴美江・高峰修
2. 発表標題 スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識因果モデルの検討
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会第30回学会大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	高峰 修 (TAKAMINE Osamu) (10409493)	明治大学・政治経済学部・専任教授 (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------